

## 現場を意識した学生指導と研究の実践

臼井 伸之介

(うすい・しんのすけ 大阪大学 大学院人間科学研究科・教授)

大阪大学大学院人間科学研究科・人間科学部には行動学系、社会学系、教育学系、グローバル人間学系の4つのコースがあります。その中の行動学系は基礎心理学、社会心理学、環境心理学、比較発達心理学、行動生理学、行動形態学など、心理学から生物学まで幅広い領域にわたる11の研究室で構成されています。本研究室は行動学系に属するまさに応用心理学的な研究を実施する研究室です。現在、教授、准教授(兼任)、助教各1名と特任研究員1名、大学院博士後期課程3名(いずれも日本学術振興会・特別研究員)、博士前期課程3名、学部4年生5名、3年生7名の計22名が所属しています。

### 研究室の役割

筆者はこれまでヒューマンエラーや事故防止の心理学的研究に携わっており、研究室としては大きく職場の安全性向上に寄与する研究を進めています。とはいえ研究室が一つのテーマに丸となって邁進するというスタイルをとっておらず、どちらかというと教員や大学院生がそれぞれ安全性・快適性の向上という共通軸に沿った研究テーマを別個に実施するという、緩やかな連合体の形態をとっています。したがって研究室の生産性としては

少々効率が悪いかもしれませんが、大学院生の問題意識の醸成と、研究室からサポートを受けての個々の研究の実施は研究者の養成にもつながり、それもまた研究室の重要な役割の一つと考えています。

### 学生指導の方針

人間科学部の学生は2年生の10月に上述した4つコースのいずれかを選択し、行動学系を選択した学生は、毎週1回各研究室が実施する実習を一通り経験した後、希望研究室に配属されます。本研究室は「実社会に活かせる研究を行う」ことをキャッチフレーズにしていますが、幸いなことに例年多くの学生が配属を希望します。

配属された学生には図1に示すような、本研

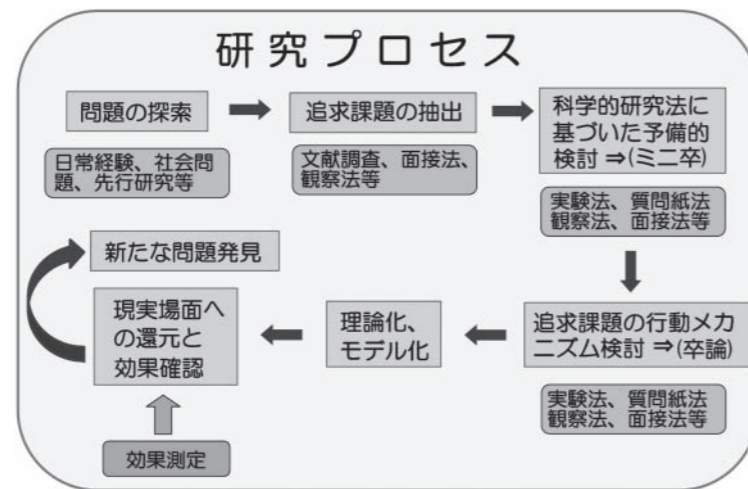


図1 研究室の研究プロセスのモデル図

究室が考える研究プロセスのモデル図を提示し、卒業論文作成までの道標とさせています。それに加えて本研究分野では、①実社会で生じている問題を研究対象とする、②研究方法は特に制限しない、③現場との連携、現場を見る眼の養成を重視する、の3つの方針を強調しています。①②の補足説明として、テーマ選択は自由だが、研究室では安全性、快適性、操作性の向上研究を中心としていること、研究方法は実験法、質問紙法、観察法など複数の研究法を組み合わせたことが望ましいことなどを加えています。また③は筆者の恩師である樋口伸吾元教授の受け売りですが、この方針を本研究室では特に重要視しています。その実践のため、研究室では工場などの現場見学に数多く出かけること、社会人大学院生を積極的に受け入れること(これまでの実績は病院看護師、厚生労働省専門官、大型船舶乗組員・大学助教、バス会社社員など)、フィールドでの調査や実験を数多く行うなど、常に学生と現場との係わりの頻度を高めるように務めています。

### エラーやリスクに関する研究

学部生のテーマ選択は比較的自由ですが、大学院生の研究テーマはヒューマンエラーやリスクテイキングなど安全に係る研究が中心となります。研究室では大学等研究機関のほか、病院や鉄道会社、バス会社、自動車学校といった各種産業界との共同研究を実施していますが、大学院生には共同研究に積極的に参画させることで研究成果の現場への還元を意識させるとともに、自身が追求する行動メカニズム解明を深化させるように指導しています。なお研究室からこの3年間に送り出した4名の課程博士論文のテーマは以下のとおりです。「無線連絡受信時における鉄道運転士の注意特性(上田真由子)」、「ドライバーの運転自己評価と運転パフォーマンスの関係(中井宏)」、「看護師の違反行動の



図2 エラー体験システムの初期画面

心理的発生メカニズムの研究(安達悠子)」、「船舶操船における衝突回避判断に関する研究(瀧真輝)」。

また筆者の研究ですが、これまで主に労働災害の分析等を通して、ヒューマンエラーに係る人間特性の研究に従事してきました。事故を防ぐためには個人だけでなく、組織や作業環境などさまざまな側面から対策を講じる必要がありますが、最終的には個人の関与は不可避なので、個人に対する安全教育も重要と考えています。とはいえ作業員に「人間はこういう時にこういうエラーをしますよ」といってもどこか他人事を受け取られがちです。そこで認知レベルでの失敗を生じやすい課題をパソコン上で設定し、その体験から自身もエラーをおかすことを認識してもらおうという「エラー体験システム」を共同研究者と開発しています。図2はその初期画面ですが、エラーの体験とそれに起因する実際の事故事例の提示をセットにし、その後グループでその問題性を討議することによりエラーに係る人間特性の理解を深めることをねらいとしています。現在はその教育効果について検討中ですが、今後も様々な産業現場と連携した研究を実施していきたいと考えています。

詳しくはホームページをご覧ください。

大阪大学 応用行動学 検索

<http://app.hus.osaka-u.ac.jp/>